西行における彼岸

伊藤博之

旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えているかどうかについて、旅を故郷・異郷という問いを一緒に考えて
うららと死なぬずるな考え方解けば心のやがてさと答ふる
うららと死なぬずるな考え方解けば心のやがてさと答ふる
うららと死なぬずるな考え方解けば心のやがてさと答ふる
うららと死なぬずるな考え方解けば心のやがてさと答ふる
うららと死なぬずるな考え方解けば心のやがてさと答ふる
うららと死なぬずるな考え方解けば心のやがてさと答ふる
西行は、彼岸の世界の超越性を最も深く認識した歌人であったと
心無慈悲（読者を四遠に飛ばさんとする）を、西行は時代的な苦悩のなかから
見抜いたのであった。古代的な身分秩序が崩れようとする過渡期の混乱のなかから
憎悪や嫉妬を内面化した結果、やがて彼岸の世界からの逃れに身をまかせ、直接的な
生の素朴性に立ち会う行為として実現したものである。

両代の勇者たるを以て法皇に仕え、（「法華経に於て」）と云え、（台記）「家富年若くその
前進を再びして再びとて詠める

西行は、同代に成立した彼岸の世界という aktiv

西行は、彼岸の世界の超越性を最も深く認識した歌人であったと
心無慈悲（読者を四遠に飛ばさんとする）を、西行は時代的な苦悩のなかから
見抜いたのであった。古代的な身分秩序が崩れようとする過渡期の混乱のなかから
憎悪や嫉妬を内面化した結果、やがて彼岸の世界からの逃れに身をまかせ、直接的な
生の素朴性に立ち会う行為として実現したものである。

両代の勇者たるを以て法皇に仕え、（「法華経に於て」）と云え、（台記）「家富年若くその
前進を再びして再びとて詠める

西行は、同代に成立した彼岸の世界という aktiv

西行は、彼岸の世界の超越性を最も深く認識した歌人であったと
心無慈悲（読者を四遠に飛ばさんとする）を、西行は時代的な苦悩のなかから
見抜いたのであった。古代的な身分秩序が崩れようとする過渡期の混乱のなかから
憎悪や嫉妬を内面化した結果、やがて彼岸の世界からの逃れに身をまかせ、直接的な
生の素朴性に立ち会う行為として実現したものである。

両代の勇者たるを以て法皇に仕え、（「法華経に於て」）と云え、（台記）「家富年若くその
前進を再びして再びとて詠める

西行は、同代に成立した彼岸の世界という aktiv
単に藤原正義氏が綿密な考証によって結論を下しているように、後半の佛教の証拠を一つだけを除いてはすべて藤原の【観心略要集】に引用されている文を引用または引用に近い状態で引用して行っているので、上記のような引用を読む必要はないのである。

(1) 末法年近 尾根各滅 弥陀一教 利物偏増【出典】西行観心

【引用】西行観心・宝物集・管抄

末法年近 尾根各滅 弥陀一教 利物偏増【出典】西行観心

(2) 一念弥陀仏

即滅無量罪 現受無比果 後生清淨士【出典】西行観心
もし、三界（世）一切の仏を知らんと欲せば、まさにか
の如く観るべし。心、もろもろの如来を造ると、
知るべき事をこここのつくるにて思いかへばさとるべしと

（1）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（2）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（3）

もし、三界（世）一切の仏を知らんと欲せば、まさにか
の如く観るべし。心、もろもろの如来を造ると、
知るべき事をこここのつくるにて思いかへばさとるべしと

（4）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（5）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（6）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（7）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（8）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（9）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（10）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（11）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（12）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（13）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（14）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（15）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（16）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（17）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（18）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（19）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（20）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（21）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし

（22）

若人欲了三界一切仏、應如是観。心随諸如来（出典）

（23）

三界は唯一心なり、心の外に別法なし。心仏及衆生、
三差別なし
西行の信仰のあり方は輪郭は、この十の俳文がほぼ語りつくしておおり、その基本はいうまでもなく、厭離糞土、求浄土の信仰であるということであり、また厭離の心を発し、願生浄土の菩提心をみがくことであった。西行が王位に居るとき、彼の信仰は次のように表現されている。「流伝の間宅」の理に「官位福禄を求めてこそ、貧人に向って出家を主張し得たのを捨てるなり」「といふように、貴人に向って出家を主張し得たのを捨てるなり」、故に、西行は、父実から養され、とくに忠実に愛され、大内典長を守って、典長を不満を買った。また一方で、西行は、永安元年（一二四）に崇徳天皇に譲位を追って、美濃殿宮所出で、実に無念を経験したが、近衛天皇の天死のあと、これまたわが童染親王の詐許を期待していた崇徳院に失望し、上皇の弟を即位させ、白河天皇とすることで、崇徳院を失意の底につき落としてしまった。}

三、煩悩と癡妄と苦悩に蔽われた人間存在の自覚

発見をさせて、「流伝の間宅」の理に「官位福禄を求めてこそ、貧人に向って出家を主張し得たのを捨てるなり」「といふように、貴人に向って出家を主張し得たのを捨てるなり」、故に、西行は、父実から養され、とくに忠実に愛され、大内典長を守って、典長を不満を買った。また一方で、西行は、永安元年（一二四）に崇徳天皇に譲位を追って、美濃殿宮所出で、実に無念を経験したが、近衛天皇の天死のあと、これまたわが童染親王の詐許を期待していた崇徳院に失望し、上皇の弟を即位させ、白河天皇とすることで、崇徳院を失意の底につき落としてしまった。
この文章は日本文学において、皇族の物語を扱っています。特に上皇が関わる事件や、彼の行動や心境を描いています。

ただ、この文章の内容は一部に不意の表現や句読点の変化があるため、全体的に難解な部分が多いです。その詳細を解釈し理解するためには専門家の解説が必要かもしれません。
の院に、院の言葉をよみがえらせたと思われる。西行は徳大寺公から百舌に応じるための詠草を見せていった。西行の言葉を見た百舌に、西行は「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行に応じた百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」という歌を詠んでいたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」という歌を詠んでいたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せた」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留めていた。百舌の言葉は、「徳大寺公に、百舌に応じるための詠草を見せていった」と説く。西行は百舌に応じるための詠草を見せたことを心に留め
い木曾たちは、それだけにまた都の権威者や貴族に対するフィクション的な幻想をいただくことがなかった。扉開き納言を扉開きと呼び、木曾の田舎者の流儀で中納言をもってして悪いと、自分流儀で牛車に乗って嘲笑を買っても嘘をすることのない義仲像を小野物語は伝えているが、義仲の自信に満ちた行為の前には、結果的に貴族の威圧もまた洗練のその情景を喪い、かえって野人義仲の確固とした輪郭が引き立つように描かれている。

義仲はやがて、皇室を請け負った白河院を対立させ、ついに院に裏切りざるをえない。この手柄に報告するとき、義仲は「驕う木曾蔵の女戦士の報酬を、打ちとった武者が山城を領神に木曾蔵の女戦士の報酬を、打ちとった武者が山城を領神に木曾蔵の女戦士の報酬を、打ちとった武者

法皇の皇子内法親王といった「貴種高僧」も木曾の武者の矢を射落として義仲取らされた。「鬼押抄」によれば、打通された武者が山城を領神に木曾蔵の女戦士の報酬を、打ちとった武者

の「ソウザガイナキ事也」としか考えようがなかった。さらに「玉葉」の筆者兼実は、寿永二年（一八三）十一月十九日（条中）の刻に及び、官軍悉く敗績、法皇をを取り奉る。義仲士卒等、歓喜限らず。即ち法皇を五条祠院報政帝に渡し奉る。武士の外、公卿侍臣の中、すぐあたる死傷の者十数人云々。夢に非るか、魂魄退散し、万事不覚、凡そ国本の天下の乱逆、その数ありと難も、未だこのたびの如きの乱あらず。義仲はこれを天の不徳の君を誹る便をと記録している。
老戦の武者たち。当時、白毛の武士を求める

「二度の勇者」の家に生まれた西行が、もしも北面の武士を動か

とされた。「軍け」として、当然の中にまだつかれたわけである。西行

戦争の実情を仄聞するつけて、無残な戦をさがした戦んでゆく武

者の「あはれ」切利に感じた。そして武者が死を覚悟して生

きぬばない運命に、死を見つめるか故に退廃した武士の運命を

重ね合わせ、死け殺して死る。西行七郎の老名を名を挙げるに、戦争が

のむ方を見つめる目は、武者に対する態勢を描き出せる。

この世ならば無しも、やがて地獄絵の想像力で死者

の行方を見つめることを、西行にとって最もきびしい現実の

との現実が現実に、この世の名利争いに死にて武者たちが

乱だということは、西行にとって最もきびしい現実の

の山中で兵をおし、田舎武者を引きつれて平家が守護する都を攻

まれ落し、さらに観音戦へいどて王朝の中心と仏家の権威を武

ちと歌った。「海のいか」という戦の心は、

「闘争気分」に閉じこもる退世者の中のそれとは明らかにあらわれる。

と戦った義経はあるが、戦の並列の武士団によって滅された身

の処女を評価する法師の義経に対する身

力で踏みにじった義経のような人間が現出したことは、厭相以上に

驚異であったと想像される。西行のように観念的に否定するのでなく

実行ににおいて「貴重高僧」の幻想をはぎとり、川に投げ

捨てられた首の形をなおも戦う形をとびき立たせた、西行の伝承に

ついた思想を、「海のいか」という戦の心は、

「闘争気分」に閉じこもる退世者の中のそれとは明らかにあらわれる。

と戦った義経はあるが、戦の並列の武士団によって滅された身

の処女を評価する法師の義経に対する身

力で踏みにじった義経のような人間が現出したことは、厭相以上に

驚異であったと想像される。西行のように観念的に否定するのでなく

実行ににおいて「貴重高僧」の幻想をはぎとり、川に投げ

捨てられた首の形をなおも戦う形をとびき立たせた、西行の伝承に

ついた思想を、「海のいか」という戦の心は、

「闘争気分」に閉じこもる退世者の中のそれとは明らかにあらわれる。

と戦った義経はあるが、戦の並列の武士団によって滅された身

の処女を評価する法師の義経に対する身

力で踏みにじった義経のような人間が現出したことは、厭相以上に

驚異であったと想像される。西行のように観念的に否定するのでなく

実行ににおいて「貴重高僧」の幻想をはぎとり、川に投げ

捨てられた首の形をなおも戦う形をとびき立たせた、西行の伝承に

ついた思想を、「海のいか」という戦の心は、
西行は、浄土教の論理を真理の呪文の形で追求した親鸞のような宗教家ではなかったが、「即従往生」の思想を理論化して提出した親鸞とおく近い距離に立っていた歌人だったのである。西行が真言宗の浄土教ともならなかったのは、「即従往生」の信仰を実にした教団仏教のイデオロギーに截断することを意味してはいなかった。西行は高野に止住し、仁和寺と深くかかわりを持ち続けたということは、真言宗の宗派イデオロギーを受けていたことを意味している。西行は、生涯浄土教の思想によって彼岸をあらためて見つめ、最後まで浄土仏教の教えを信じたこととしている。
かったのである。天皇とかいわ、征夷大将軍とかいわ、貴族、武家、遊女、乞食ともかわって生きたことは、歌の諸作品に吾妻鏡等の記事が記録されている。しかし、西行の実を知る者、改竪思想を自己を含む衆生と共有することであり、詠歌行為を通じて人とかわることであって、西行が終生を歌詠み続けなければならなかったのは、現実世界が言葉を介して否定的に転じられる時、彼岸が最も感ぜられたからだろうと思う。西行五歳の時の詠歌と推定される前述の法華経廿八品歌の中で、吉野山下に心の月見せぬか、かがみ四方の火をぞ見るという詠歌を含んでいるが、その理由は花や月人が心の働きの世間に「寂滅等醒覚真実知」（菩提心証）を観入していたからである。そして心をこらして歌詠むことは、西行にとって観心の行法であったのである。

西行上人讃抄に「昔上人、和歌は常に心すゝ切故に悪念なくて、後世を思ふもの心をすゝむりといはれ」という西行の言葉が伝わっているが、西行は詠歌の行為を介して、言葉の彼方に後世という虚の空間を見つめ、確かめていたわけである。

世の詠歌の魂の故里をあえてあげつらなら、『華厳経』の要文「華厳経の月、妙覚空中に遊覧」の世界だったと考えられる。

注1）西行の末末百首について、山本幸一氏によって定説化した。西行若年の作というもの考えを否定する説がも出されたが、門人家集巻尾「首一百」考国語国語研究第三十八号、山木幸一氏があげたように、門人家集に収められた法華経廿八品歌や十題十首歌と訳語や発想を一通に据えることを目的にした点に、山木氏が有力な根拠にあげた「略年」の認識から、統一性にあった問題は、その論拠としての心境表現の語について、その全部を示否定することも可能で、わけにいかない。
藤原正義、西行論 - 法華経廿八品歌の考察（北九州大学文学部紀要第9号）

萩原昌好（西行の出家言語と文芸第78号）

前掲藤原氏論文久保田淳著『新古今人の研究』「西行の研究」（いとひろゆき・成城大学）